

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02438

研究課題名（和文）ドイツ語圏の入試改革に関する総合的研究

研究課題名（英文）Secondary school/University articulation reform in Austria and Germany

研究代表者

伊藤 実歩子（ITO, Mihoko）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30411846

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ドイツ語圏の中等教育修了資格試験を日本との比較を踏まえながら検討した。前者を、生徒が大学を選択する制度であり、後者を大学が生徒を選抜する制度であるとした。前者の方が、後者よりも多様な試験方法、例えば、数時間にわたる記述試験、口頭試問、探究的なレポートなどを課していることが明らかになった。

本研究はさらに対象をヨーロッパ全体に拡大し複数の国における中等教育修了資格試験の改革と課題を検討した。加えて、欧州の中で広がりつつある探究学習の大学入試科目必修化についても検討した。以上の成果は2冊の学術書として公開することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧州における大学入試（中等教育修了資格試験）の研究は、新聞やテレビなどでも成果が公開される機会が多く、社会的に広く関心を集めるものであったと認識している。少子化が進み、かつてのような選抜性の高い大学入試ができなくなっている日本において、公平性・公正性を担保するよう制度設計しようとしている欧州の入試改革は、アメリカの大学入試よりも日本の制度設計により親和性が高いものと考えられる。また入試の制度設計にとどまらず、現在の日本の後期中等教育において課題である探究学習について研究を拡大深化することができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, the secondary school certificate examinations in German-speaking countries were examined in comparison with those in Japan. The former was defined as a system in which students select universities, and the latter as a system in which universities select students. The former system imposes a greater variety of examination methods than the latter, such as written examinations lasting several hours, oral examinations, and exploratory reports.

The study further expanded its scope to Europe as a whole, examining reforms and challenges of secondary school certificate examinations in several countries. In addition, the study also examined the growing trend in Europe to make inquiry-based learning a requirement for secondary school certification examinations. The above results were published in two academic books.

研究分野：教育方法学

キーワード：大学入試 マトゥーラ アビトゥア 探究学習 高大接続

1. 研究開始当初の背景

研究開始前後の日本では、大学入試センター試験の改革に関して多くの議論がなされていた状況にあった。そこででの中心的な議論の一つは、100 字程度の記述式問題の導入の是非をめぐる問題であった。しかし、結局、この改革はとん挫し、新しい「大学入学共通テスト」での記述式問題の導入は見送られた。そして、その後、このテーマが改めて論じられることは今もってない状況にある。

そこで、高校での学習の意味や意義そのものを理解し、大学での学修の意欲を高め、保持し、高校の学習の成果を保障しながら、大学の学修・研究にスムーズに入っていけるような、入試のあり方を検討する必要があると考えた。こうした大学入試のあり方を、長時間にわたる記述試験や口頭試験の文化を持つドイツ語圏の後期中等教育修了資格試験を通して検討することが、研究当初の背景にあった。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、次世代の大学入学試験の構想を、ドイツ語圏の入試改革(後期中等教育修了資格試験(アビトゥア・マトゥラ)の改革)を参照しながら基礎づけることにあった。このドイツ語圏の入試改革は、ドイツ語圏の教育制度において PISA を強い原動力として着手された教育改革が高大接続・高等教育へと及ぶことになったことを示していた。

このことから、第二の目的は、PISA による教育改革は教育(制度)全体にわたりどのような影響をもたらしたのかを明らかにすることであった。これは、学校教育の制度や実践現場だけでなく、教育学、とりわけ申請者の専門である教育方法学(ドイツ語では一般教授学(Allgemeine Didaktik)に相当)、カリキュラム論、教育評価論への影響の検討を含んでいる。

3. 研究の方法

上記の二つの目的に対する研究の方法は、(1)歴史・理論的研究、(2)実証的(質的)調査研究の枠組みで進めた。

(1) 歴史・理論研究では、アビトゥア・マトゥラ試験の 200 年以上に及ぶ歴史を概観した。ここでは、ドイツ語圏の中等教育修了資格試験における記述試験、口述試験の文化的・歴史的背景を明らかにした。下記する通り、実証的調査研究が進められなかったことで、理論研究により注力した。こうした研究から、関連する新たなテーマにも着手した。すなわち、欧州の大学入試の必修・選択科目として、いわゆる探究学習(日本でいうところの総合的な探究の時間)が位置づけられる傾向にあることが明らかになり、欧米の探究学習の歴史と現在の教育実践を検討した。

(2) 実証的(質的)調査研究で、当初計画では、オーストリアのギムナジウムでの授業研究を予定していたが、コロナ禍において十分には遂行できなかったものの、可能な範囲で、ギムナジウム、小学校など教員・校長へのインタビューや授業観察を行った。

4. 研究成果

上述した通り、実証的(質的)調査研究は、コロナ禍によって研究に必要な継続的な研究が難しかった。しかしながら、歴史・理論的研究を中心に、研究の対象領域を拡大することでその不十分さを補充するように努めた。すなわち、ドイツ語圏に限定せず、他研究者の協力も得ながら、欧州の大学入試改革を研究期間の前半で実施した。次に、その成果から、入試改革と関連がある探究学習に関する研究を進め、両テーマにおける欧州の動向を総合的に検討することで、日本の大学入試あるいは探究学習に関する課題を相対化することができた。

特に、大学入試改革の研究から探究学習の研究に展開することは、本研究を開始する以前には予想していなかった。その意味で、本研究は当初テーマにとどまらず、発展的な課題においても成果を出すことができたと考えている。

なお、オーストリアに関しては、PISA 以降のコンピテンシー改革が、初等中等教育修了段階にまで一貫しておよんでいることを、マトゥラ(後期中等教育修了資格試験)改革の内実から明らかにした。こうした状況を、申請者は「PISA 型教育改革」と呼び、PISA の結果に強く依拠する一国の状況を初等教育から高等教育の入り口に至るまでを素描することができた。

加えて、ドイツ語圏の中等教育修了資格試験に伝統的な試験方法、すなわち、数時間に及ぶ記述試験や、15 分程度で実施される教科の口述試験に関して、カリキュラム、教育評価、教育方法の観点から検討を行った。さらに、PISA 以降の教育の動向として、問題解決的な学習が重視されるようになった影響として、マトゥラにおける探究学習の必修化に着目し、その実態と課題についても検討した。

これらの研究から、日本の大学入試改革においてこうした改革をそのまま移し替えることはできないものの、オーストリア(および欧州各国)の課題克服の状況などを考慮すれば、日本に

においても記述試験や口述試験、あるいは探究学習のような試験方法は、例えハイスティクスなものであっても導入可能であると考えている。

本研究の学術的な成果としては、以下に記した2冊の著書が挙げられる。欧州あるいは欧米の動向を広く取り扱ったことで、以下のように、大学入試改革および探究学習に関わる日本の課題が見えてきたからである。

欧州の大学入試改革(【著書】)から得た知見は、入試の判定に関係諸機関(高校、大学、試験機関など)の複数関与、統一試験で判定する教科、学校主体で評価する教科があってよい、ステイクホルダーとしての受験生の関与、の3点にまとめられる。

加えて、探究学習においては(【著書】)、中等教育に広がる探究学習の導入、実践には課題があるものの、すでにハイスティクスな大学入試において導入することは一般的になっており、探究学習専門の教員不在の中では、探究学習の質や評価の方法の枠組みにおいてある程度の形式が必要である、ということを描きおきたい。

欧州あるいは欧米の教育を範とするのではなく、その課題及びその背景も詳細に検討することに注力してきた。しかしながら、最後にこれだけは強調しておきたい。大学入試改革は、初等・中等教育改革に比べると、どの国においてもハードルが高い。国民の反対は常にある。それでもなお、そうしたことを踏まえながら、各国はさまざまな改革に踏み切っており、その中でまたさまざまに修正を繰り返している。今後、こうした欧州の動向を踏まえた大学入試改革が日本にも必要なのだろうと思う。

本研究は、これまでの申請者の研究テーマとは異なり、広く社会への関心を呼ぶものであったことを記しておきたい。

欧州の大学入試に関する研究、とりわけその歴史から現在の改革、さらには具体的な試験の問題、それに対応するカリキュラムや授業、評価に至るまでの包括的な研究は皆無であったために、各所から反響があった。まず、朝日新聞の書評に取り上げられ、広く一般の人々に本書を知らせることができた。また高校生の進路選択を支援するサイトでも本研究が取り上げられた(<https://miraibook.jp/researcher/k0473s>)。

一方で、申請者の所属学会以外の大学入試センターや日本ドイツ学会などにおける発表では、それぞれの分野の研究者らとともに専門性の高い議論ができた。

本研究実施期間中、2021年8月から2022年8月までの一年間、勤務先大学の海外研究制度を利用して、ウィーン大学心理・教育学研究科の比較教育学研究室(受け入れ教員: Prof. Dr. Barbara)に客員研究員として滞在した。その際に、オーストリアの大学入試改革あるいはその背景にあるコンピテンシー改革、またドイツ語圏の教育文化全般に関する小文を連載する機会も得た。

そうしたことから、世界の大学入試を取り上げることで人気のあるNHK・Eテレの『ニュー試』でオーストリアの大学入試に関する番組に出演し、小国オーストリアの大学入試に関して、広く社会の関心を得たと考えている。

【著書】

伊藤実歩子編著『変動する大学入試』大修館書店、2020年。

伊藤実歩子編著『変動する総合・探究学習』大修館書店、2023年。

【論文】

(単著)

・伊藤実歩子「コンピテンシーの次に来るものは何か? オーストリアの教育改革の20年間」『立教大学教育学科研究年報』第66号、pp.27-40、2023年。

・伊藤実歩子「『生活科』と『総合的な学習の時間』の接続と展開の可能性: オーストリアの事実教授の理論と実践」『立教大学教育学科研究年報』第65号、pp.3-16、2022年。

・伊藤実歩子「オーストリアの大学入試改革 ドイツ語マトゥーラにおける文学の位置の議論」『立教大学教育学科研究年報』第64号、pp.199-208、2021年。

・伊藤実歩子「オーストリアのマトゥーラ改革 探究型論文の導入とその評価」『令和3年度多面的・総合的な評価に基づく大学入学者選抜に関する海外調査報告書』pp.125-127、2021年。

・ヴィガー・ロター、伊藤実歩子「Bildung(ビルドゥング)とアビトゥア」『立教大学教育学科研究年報』第62号、pp.185-196、2019年。

・ヴィガー・ロター、伊藤実歩子「『Bildung(ビルドゥング)』と評価」『立教大学教育学科研究年報』第62号、pp.197-205、2019年。

(共著)

・木戸裕、栗原麗羅、伊藤実歩子「ドイツとオーストリアにおける高大接続改革 アビトゥーラとマトゥーラをめぐる近年の動向」『ドイツ研究』56(0)、39-50、2022年。

【その他】

NHK Eテレ 『ニュー試』「オーストリアの政治教育」出演（2024年1月27日）

YouTube 『溝上慎一の教育論チャンネル』「(新著の紹介)変動する総合・探究学習 欧米と日本
歴史と実践」(NO.175)

Web連載 『ウィーン・飛ぶ教室』日本標準ホームページ、2022年4月14日 2023年3月16日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤実歩子	4. 巻 66
2. 論文標題 コンピテンシーの次に来るものは何か? - - オーストリアの教育改革の20年間 - -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立教大学教育学科年報	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤実歩子	4. 巻 0
2. 論文標題 オーストリアのマトゥーラ改革 探究型論文の導入とその評価	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和3年度 多面的・総合的な評価に基づく大学入学者選抜に関する海外調査報告書	6. 最初と最後の頁 125, 127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊藤実歩子	4. 巻 65
2. 論文標題 「生活科」と「総合的な学習の時間」の接続と展開の可能性 オーストリアの事実教授の理論と実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学教育学科 研究年報	6. 最初と最後の頁 3,16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 木戸裕、伊藤実歩子、栗原麗羅	4. 巻 56
2. 論文標題 ドイツとオーストリアにおける高大接続改革 アビトゥーアとマトゥーラをめぐる近年の動向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ドイツ研究	6. 最初と最後の頁 39,50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤実歩子	4. 巻 64
2. 論文標題 オーストリアの大学入試改革ードイツ語マトゥーラにおける文学の位置の議論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学教育学科年報	6. 最初と最後の頁 243252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 伊藤実歩子
2. 発表標題 オーストリアのマトゥーラ改革 コンピテンシーと文学
3. 学会等名 日本ドイツ学会 フォーラム1
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤実歩子
2. 発表標題 オーストリアのマトゥーラ改革と探究的な学習
3. 学会等名 日本カリキュラム学会 自主企画セッション ラウンドテーブル
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤実歩子
2. 発表標題 オーストリアのマトゥーラ改革と歴史・社会・政治科の評価
3. 学会等名 広島大学EVRI定例オンラインセミナー講演会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤実歩子
2. 発表標題 変動する大学入試ーオーストリアのマトゥーラ改革から考える
3. 学会等名 大学入試センター2020年度第3回調査室研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤実歩子
2. 発表標題 変動する世界の大学入試 ヨーロッパを中心に
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤実歩子
2. 発表標題 PISA以降のオーストリアにおける入試改革ー統一マトゥーラ改革の意義と課題ー
3. 学会等名 教育目標・評価学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 伊藤実歩子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 234
3. 書名 変動する総合・探究学習	

1. 著者名 伊藤実歩子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 278
3. 書名 変動する大学入試 資格か選抜か ヨーロッパと日本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ウィーン・飛ぶ教室 https://www.nipponhyojun.co.jp/blog/kyoiku/all/all/6134-z/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------